

【特徴】

当センターは、大阪市の高次機能病院としての役割があり、耳鼻いんこう科においても領域全般にわたって研修ができる。当センターの特色は、小児医療の比重が高いことであり、小児医療センターの中には全国的にも例のない「小児耳鼻いんこう科」という診療科を設けている。

成人部門では、頭頸部腫瘍の取り扱い数が多いが、嗅覚味覚障害の診療に力を入れているのも特徴である。また、脳神経外科、形成外科、口腔外科などの他科との境界領域疾患の共同治療症例も多い。小児部門では、難聴の診療が最重点項目であるが、小児特有の疾患、手術症例の取り扱いも多い。

【研修目標】

1. 一般目標

耳鼻咽喉科・頭頸部外科を標榜する医師として、社会のニーズにあった十分な診療のできるレベル、すなわち日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医（以下、耳鼻咽喉科専門医）として資格をとり、活動できることを目標とする。さらにその上で、医療のみならず福祉、公衆衛生、学校保健などの問題にも対処する能力や、より深い専門的領域のスペシャリストとしての能力を身につける。また臨床医学研究を行いその成果を社会に還元することを目標とする。

具体的には、以下の項目を修得する。（日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医研修目標より要点を抜粋）

- (1) 基本的診療（診察、検査、治療、手技）の知識・技能・態度の修得
- (2) 緊急患者の初期診療
- (3) 慢性疾患・高齢患者の管理
- (4) 末期患者の管理
- (5) 患者・家族との人間関係
- (6) 患者の心理面・社会面の問題解決、説明、指導
- (7) 医療メンバーとの協調
- (8) 紹介・転送に関する適切な判断
- (9) 適切な診療録の作成
- (10) 思考力、判断力、創造力、自己評価能力の養成

2. 行動目標

A. 外来診療

耳鼻咽喉科領域（耳、鼻、口腔、咽頭、喉頭、頭頸部、気管（支）、食道およびそれらの中枢神経領域）の外来患者診療を以下の諸点に留意して適切に実施する能力を養う。

- (1) 患者の受入れ、問診、文章の作成
- (2) 診断、検査
- (3) 鑑別診断
- (4) 治療
- (5) リハビリテーション、リハビリテーションへの対応
- (6) 救急、偶発症への対応

B. 入院診療

主治医として耳鼻咽喉科領域の基本的臨床能力を持ち、入院患者に対して全身、局所管理を適切に実施できる。

- (1) 術前術後の全身管理と対応
- (2) 非手術例（悪性腫瘍の放射線治療および化学療法、その他の疾患（重症感染症、自己免疫疾患、鼻出血、めまいなど））の全身管理と対応
- (3) 偶発症に対して迅速かつ的確な処置

- (4) 他科の疾患の対応、関連科医師との連携
- (5) ターミナルケア
- (6) リハビリテーション、関連部門との連携
- (7) 臨床経過と剖検所見との関係の検討と考察
- (8) 専門領域の技術（手術、非手術的治療、検査、救急医療、リハビリテーション）

C. 検査

原理と方法を理解し、適応を定めて、患者（被検者）のもつ問題解決のために利用することができる。全体で108項目が設定されている。

- (1) 自ら実施し、検査データを判定評価することができるもの：73項目
- (2) 標本の採取、検査の指示・依頼を行い、検査データ及び報告を判定評価することができるもの：27項目
- (3) 指示または依頼して判定評価の結果を利用することができるもの：8項目

D. 手術

手術に関する一般的知識・技能を修得しているとともに、耳鼻咽喉科領域の基本的な手術法の原理と術式を理解し手術ができる。全体で175術式が設定されている。

- (1) 自ら実施できるもの：86術式
- (2) 指導医の下で手術を自ら実施できるもの：21術式
- (3) 手術の助手を務めることができるもの：68術式

【方略】

日常診療業務の実践を行いながら、指導医の添削、評価を受ける。科内のカンファレンス、他科や他職種との合同カンファレンス、院内外での各種の講習会への参加、院内での研究発表、学会・研究会への参加・発表（症例報告、研究発表）を継続的に行う。

【評価】

上記の行動目標について自己評価を行い、かつ指導者から評価を受ける。

【研修プログラム】

単年度ごとの目標を細かく設定することは困難であり、全ての項目は継続的に習得しなければならないが、大まかな目安は以下のとおりである。

○レジデント

1年目：入院診療の開始、研修目標の「一般目標」をひとつおとり修了する。

2年目：外来診療の開始。

3年目：研修目標の「自ら実施できるべき項目」をひとつおとり修了する。

○シニアレジデント

1年目：耳鼻咽喉科専門医研修目標を完了する。

2年目：耳鼻咽喉科専門医の資格を取得する。（受験には、初期研修終了後、耳鼻咽喉科専門医制度認定研修施設での4年間の研修を修了している必要がある）

3年目：臨床研究活動を行う。

シニアレジデント最終目標：難度の高い手術を習得するなど、専門的領域のスペシャリストとしての能力を身につける。臨床研究活動の成果をまとめる。

原則は、上記6年間の継続研修が基本である。ただし、単年度ごとに希望調査を行い、個人の希望により継続するかどうかを決める。他施設で研修を受けていた場合は、その経験年数、修了内容に応じて、シニアレジデントとしての編入も可能である。

○専門領域志向研修

耳鼻咽喉科は取り扱う領域が非常に広いので、高度の医療技術を身につけるためには、科内での専門的領域すなわちサブスペシャリティを深めることも望ましい。そのため、上記の耳鼻咽喉科医としての基本研修を行いつつ、関連の他科、関連の専門病院などでの研修をフレキシブルに組み入れた研修形態をとることも可能である。レジデント期間では院内の他科を3ヶ月から6ヶ月程度専属的に研修を行い、シニアレジデント期間では、難度の高い手術など本院の研修では十分に身につけることの困難な領域について、その領域に秀でている他の病院での3ヶ月から1年程度の短期研修を行う。

- ① 頭頸部外科コース：形成外科、脳神経外科などのローテート
- ② 小児耳鼻咽喉科コース：小児科、小児外科などのローテート

【見学等問い合わせ先】

耳鼻いんこう科部長 愛場 庸雅
小児耳鼻いんこう科部長 中野 友明